

オバマの広島スピーチはこうあるべきだった

【訳者注】これは、広島でこう言ってほしかったという、架空のオバマ演説であり、オバマ大統領ないし戦争屋としてのアメリカが、もし完全に良心と理性を取り戻したら、このように言うはずだという、悲痛な、自己告発演説になっている。これはアメリカに対する憎しみを煽るためのものでなく、よく現実を知って行動するためのものである。ここに示唆されているのは、原爆投下によって終わったあの戦争が、一つの息の長い、理不尽な、アメリカの世界支配戦争（NWO 実現への過程）の一部であり、現在、米 - NATO がロシアに仕掛けようとしている戦争が全く正当化できないように、71 年前のアメリカの日本に対する戦争も、全く正当化できないものだったということ、原爆がテロであるように、アメリカの戦争の本質もテロだということである。原爆だけでなく「そもそも日本に対する戦争を正当化するのがほとんどなかった」と論者は言う。真珠湾攻撃は「追い詰められた」者の、ハメられた行動だった。巧妙な War Guilt Information 計画や東京裁判によって植え付けられた一方的な犯罪者意識は、払拭すべきであることがわかる。（文中の強調は訳者による）

Matt Peppe

May 28, 2016, Information Clearing House



バラク・オバマは、金曜日、広島を訪問した最初の米大統領になった。それは、アメリカの B29 爆撃機 “エノーラ・ゲイ” が、アメリカのタンパ市ほどもない軍事的価値の都市に、“リトルボーイ” というあだ名の、1 万ポンド原子爆弾を落としてから、70 年以上後のことであった。7

万人以上の人々が即死し、ほとんど都市全体が破壊された。多くの生き残った人々は、長引く、想像できないほどの苦痛を与える、放射能による後遺症に苦しむことになり、それによって少なくとも更に 10 万の人が死んだ。放射能の影響は、最初の爆発の後、何年も、何十年も人々の心身を蝕んだ。

オバマは、爆心地である原爆ドームを背景にして演壇に立ち、自分は「亡くなった方々の追悼のためにきた」と言った。彼が述べる弔辞の中に一つ欠けたものがあった——謝罪である。

彼は、「死は天からやってきた」と言った。なぜかは言わなかった。誰がやったのかも言わなかった——現実の人間の犯した罪でなく、自然災害であるかのように。オバマには、真実に直面して償いをする意志はなく、それはできないことだった。

<http://mobile.nytimes.com/2016/05/28/world/asia/text-of-president-obamas-speech-in-hiroshima-japan.html?referer=>

以下に、本来なら、彼が言うべきだった内容を述べてみよう——

71年前、晴れた雲のない朝に、アメリカ空軍機が、かつて人間の作った、最も恐ろしく、非人間的な兵器を開放し、たちまち全人類を生き残りの危機に陥れました。このテロリズムの行為は究極の犯罪でした——大量殺人の罪、戦争犯罪、人類に対する犯罪でした。犠牲者の方々、閃光の中で焼かれて死んだ方々、それに化学的毒物によって、何年も苦しんでゆっくり死んでいった方々は、正義の裁判を見ることはありませんでした。残念ながら、この忌まわしい、野蛮な行為を実行した犯罪者たちに、彼らの犯罪に対する裁きを受けさせる方法はありません。

私はそれを変えることはできません。しかし、その名において広島に爆撃が行われた国家の指導者として、私にできることが一つあります——私はあなた方、広島に住む方々と日本の方々に対し、申し訳なく思っている、とすることができます。私は、私の政府と私の国家を代表して、ここに謝罪申し上げます。私は、アメリカの大統領がもっと早くきて、これを言うべきだったと思います。この謝罪は何十年も遅れてしまいました。それは小さな、象徴的な行動ですが、真の和解のための第一歩として必要なものです。

核爆弾を広島に落とすべきではありませんでした。人類の最も重要な目標は、いかなる核爆弾も決して再び落とさないと確約することであるべきです——世界のどこにも、未来永劫。

ここに立って、なぜアメリカ軍と政府高官が、核爆弾の使用を選んだのか、その理由を言うことは簡単でしょう。もし戦争がこれ以上続いたら失われたであろう人の命を、それは救うための、より良い選択であったとすることもできます。また、それは、戦争を続けることのプレッシャーと恐ろしさに直面していた人々による決断だった、とすることもできます。しかし、それは真実ではないでしょう。それは空虚な理屈付けにすぎないでしょう。この爆弾を正当化するものは何一つありません。ただそれだけです。

本当のところは、1945年8月6日には、日本はすでに敗北し、何か月も前から条件降伏を模索していたのです。そしてアメリカの戦争計画者はこれを知っていました。彼らがそれを知っていたのは、日本の暗号を読み解き、通信を傍受していたからです⁽¹⁾。

日本は、日本民族の間で神と見られていた天皇が、退位させられることなく、戦争犯罪を問われないという条件で、降伏する準備をしていました。天皇ご自身が、運命の日の6週間前に、「戦争を終わらせる計画」を要求しておられました⁽²⁾。これほど多大な、口に言えない破壊と死のあとで、この理にかなった申し出は、狂喜の祝福と安堵によって迎えられるべきでした。

ところが、アメリカの政府高官はそれを無視しました。彼らは、単に日本を敗北させるだけでなく、彼らに完全な屈辱感を与え、名誉を失わせることが必要と決断しました。彼らは、自分たちが、もう一つの国でも跪かせることができ、完全に支配できることを、彼らの民衆に対して証明しようとしたのです。これはテロリスト、拷問者、サディストの精神構造です。

アメリカは、中国および大英帝国と結んで、7月26日に「ポツダム宣言」を宣し、そこで彼らは日本に対し、「すべての日本の武装軍隊の無条件降伏を、今、公布する」ように求めました。これは、日本が受け入れることはできないだろう、と彼らの考えた条件でした。

<http://www.atomicarchive.com/Docs/Hiroshima/Potsdam.shtml>

不幸なことに、「マンハッタン計画」に代表されるような、時間と貴重な資産の巨額な投資の後で、原子爆弾の使用は避けられないものになっていました。軍事プランナーたちは、「巨額のカネを使った後で、この爆弾が失敗作である可能性があること、そして、議会の敵意をもつ者たちによって、無慈悲に叩かれることは十分に考えられた」ために、思い悩んでいました。

歴史家で、核規制委員会に雇用されていた J. Samuel Walker は、「戦争を早く終わらせ、アメリカ人の生命を守ることとは別に、トルーマンが、原爆製造に要した費用を正当化しようとした」ことを確認しています。

財政的な考慮と、官僚たちが自分の正しさを証明し、地位を保全するための自己中心の欲望が、歴史上ただ一つの最も破壊的で残酷な行動につながったというのは、ゾッとするような恐ろしい話です。それは、人間は生まれつき道徳的であるという観念を、完全に裏切るものです。どうして、民主主義社会において、このように深刻な影響力をもつ決定をする権威を、密かに、無責任に、他人に委任することができるのか不思議です。

ウォーカーは、広島にこの爆弾を用いた、もう一つの考えられる理由は、ソビエトの指導者に恐怖を吹き込んで、彼らを「アメリカの意志に容易に従わせる」ためだったと言っています。そのわずか6週間前に「国連憲章」が制定されています。そこには、「すべての参加国

は、その国際的關係において、(他国に対する)脅迫や武力の行使を慎まなければならない」という条項があります。この条約の起草者は、その文言のこれほど非良心的な蹂躪が、この記念碑的な条約の書かれたこれほど直後に、起こるとは想像できなかったでしょう。

広島原爆は確かに恐ろしいものですが、それは真空の中で起こったことではありません。主流のアメリカの政治的論説で、これまで誰も認めることのできなかつたことは、この爆弾を正当化するものは何もないだけでなく、そもそも日本に対する戦争を正当化するのが、ほとんどないということです。

この戦争は、1941年の外交問題評議会(CFR)において初めて現れた、ある考えから起こったものです。それは、アメリカの“国益”にとっては、西半球、大英帝国、それに極東からなる“大領域”が必要だという考えで、ヨーロッパの大半は、ナチス・ドイツに支配されると仮定しています。これが、極東の支配のためには、日本との軍事対決が必要だとする政策に変わっていきました⁽³⁾。

この政策の一つの柱は、日本に対する経済的通商制裁でした。米・英からの輸入と原材料を差し止められて、日本は自暴自棄になり、結果として、その帝国の範囲を広げようとしてきました。日本は、アメリカと同じ極東の領域を含む、影響圏を必要とするようになりました。

アメリカには、いくつかの戦争を避けるための選択肢がありました。一つは、農業と経済的自給自足のプログラムを立てることで、これによって彼らは、植民地強国への依存から離れると共に、予言できない、敵意をもつ可能性のある、世界の地域から退くこともできたはずですが。

しかし、経済の方向をコントロールし続け、彼ら自身の富が限りなく増大し続けることを目論む実業家にとっては、これでは話になりません。そこで彼らは、日本に挑戦することに専念しました。通商制裁はそうにして始まり、そこから東アジアに対する軍事対決の機運が、不可避的に高まっていきました。

これが真珠湾攻撃の背後にあったものです。日本は確かに、あからさまな攻撃行動によって、主権あるアメリカ領土を攻撃する正当な理由は、ありませんでした。しかし、我々は、それは予見できることでも、彼らの立場から、筋の通ったことでもないかのように、言い張ることはできません。

日本は、通商制裁によって追い詰められたと感じていました。彼らは更にアジアへと勢力を拡張する必要を感じました。彼らは、もしそういうことをすれば、アメリカ軍が攻撃してく

ることはわかっていました。その通りになりました。

両国とも、協力して互いの利害を認識し、エスカレートしないように、そして互いに受容可能な妥協に到達すべきでした。人間が動物と違うところは、敵と認知したものを、理性をもつ相手として理解する能力であって、邪悪な、非人間的な敵と考えないことです。もし我々がこの能力を使うことができなければ、獲物を狙う捕食動物にすぎません。

広島核攻撃は起こる必要のないものでした。しかし、ここで起こった爆撃は、それが一部であるこの戦争全体の本質をよく現すものです。戦争は必然的に身の毛のよだつような犯罪を生み出し、そのあるものは、それが起こったときには想像できないほどです。核爆弾がいかにも恐ろしいといっても、その後の70年間の技術的進歩は、一つの都市全体を破壊しただけでなく、その能力の及ぶ限り、一国あるいは一つの大陸を破壊しています。

私たちは核兵器を地球上からなくさなければなりません。しかしそれだけでは十分ではない。ナバーム弾や枯葉剤のような化学兵器、使用済みウラン、白リン弾、また、 Dengue・バクテリアや細菌爆弾のような生物兵器、それにクラスター爆弾やパイナップル爆弾、バター爆弾、地雷などの通常兵器もあります。これらは第二次大戦の終了以来、米軍だけが、長年にわたって、何百万の人々を殺し、傷害を与えるのに使用してきた、野蛮な兵器の数例にすぎません。他の多くの国も、同じような大量破壊兵器を所有し、同じことをする能力をもっています。

私たちは戦争を根絶しなければなりません——すべての戦争を、永久にです。戦争は悪です、明瞭で単純です。我々は過去の行為を消すことはできません。しかし、それを導きとして、71年前にここ広島の人々が経験された恐怖を繰り返さない、より良い世界を創ることができます。それだけが、犠牲者の方々の死を無駄にしない唯一の方法でしょう。

References

[1] Zinn, Howard. *A People's History of the United States: 1492-Present*. New York: HarperCollins, 2003. pp. 423.

[2] U.S. Strategic Bombing Survey: The Effects of the Atomic Bombings of Hiroshima and Nagasaki, June 19, 1946. President's Secretary's File, Truman Papers.

http://www.trumanlibrary.org/whistlestop/study_collections/bomb/large/documents/index.php?pagenumber=33&documentid=65&documentdate=1946-06-19&studycollectionid=abomb&groupid=

[3] Shoup, Laurence H. and William Minter. *Imperial Brain Trust: The Council on Foreign Relations & United States Foreign Policy*. Lincoln, NE: Authors Choice Press, 2004.

Matt Peppe writes about politics, U.S. foreign policy and Latin America on his blog. You can follow him on twitter.